« LA CHEVRE ET LE LOUP DES ARDENNES »

CHARLES KOECHLIN

ET

FLORENT SCHMITT

アルデンヌの山羊と狼

ケクランとシュミットの音楽

2004年4月7日（水） 14:15

横浜港南区民文化センター ひまわりの郷ホール

後援／フランス大使館 文化部

アルデンヌの山羊と狼

今回のコンサートでは，近代フランスを代表する二人の作曲家，シャルル・ケクランとフローラン・シュミットの音楽を皆さんにご紹介致したい．

ケクランとシュミットは，年齢も三つ違いの同年代であり，同じフランス東部地方の出身である．作曲の師匠も二人共通で，当時の二大巨匠，ジュール・マスネとガブリエル・フォーレに学んでいる．流行に流されることなく，オリジナリティあふれる作風を堅持したアンデパンダン（独立独歩）の人であったことも共通している．興味深いのは，そうした共通点をあわせ持ちながら，二人の音楽が全く正反対の個性を示していることで，その対比の妙を，そのまま今回の演奏会のタイトルとして据えた次第である．

二人の作曲家の略歴を簡単にご紹介しておきたい．

シャルル・ケクランは1867年11月27日生まれ．ケクラン家は，アルザスの富裕な実業家の家系である．パリ音楽院に学び，フォーレの助手も長く務めた．音楽批評家，理論家としても優れ，作曲法，対位法，管弦楽配置法の教科書は名著の誉れ高く，日本でも広く普及している．作曲家としては，稀に見る美旋律の書き手として知られ，柔和で洗練されたハーモニーも魅力である．一方，晩年には前衛的な問題作も多数残しており，その全貌は未だ明らかにされていない．1950年12月31日，コート・ダジュールにて死去．

ケクランの音楽は，時間，空間を超えて，現代の人間に安らぎを与えてくれる．百年以上も昔に，静謐な美の追求に生涯を捧げた職人気質の作曲家が存在していたこと．その厳然たる重みに思いを致さざるを得ない．ケクランの音楽に耳を傾けるとき，現代に生きる私たちは，その普遍的な美質に触れて心洗われる思いを味わうのである．商業的な「癒し」のために生産される虚偽的な音楽によっては，人間は決して癒されることはないということを，まざまざと知らされるのである．

CHARLES KOECHLIN, 1867–1950

FLORENT SCHMITT, 1870–1958

フローラン・シュミットは，1870年9月28日，フランス・ロレーヌ地方のブラモンに生まれた．アール・ヌーボー発祥の地ナンシーで音楽の基礎を学び，後にパリ音楽院で研鑽を積む．30歳でローマ大賞獲得．甘美なロマンティシズムを基調にしながらも，強靭な躍動感，絢爛豪華な響き，圧倒的な構成感を盛り込み，野趣に富む作風を得意とした．最晩年まで現役で作曲を続け，元老としてフランス楽壇に長く君臨したのであった．1958年8月17日ヌイー＝シュル＝セーヌにて死去．

シュミットは，若い時分，ローマ大賞受賞者として，イタリア留学という栄誉を勝ち得たが，寄宿舎としてあてがわれた名門メディチ荘での生活に退屈し，部屋を空けて旅に出ることが多かった．《規則を守らない寄宿生》という呼び名はその時分のものである．のち，フランス楽壇で確固たる地歩を築いたのちも，気性の荒さと歯に衣着せぬ言辞が楽壇の畏怖の的となり，誰からともなくシュミットを《アルデンヌの狼》と呼ぶようになったという．この《狼》は，若手作曲家の育成にも熱心であった．1920年代，ブラジルから音楽修行にパリに出てきた野生児ヴィラ＝ロボスの才能を，シュミットがいち早く認めて賛辞を惜しまず，生涯にわたる友情を結んだことは特筆すべきことである．

シュミットの音楽は，豪放磊落な個性がよく現れており，深みのあるロマンティシズムを湛え，大人の諧謔味に富んだ魅力的なものである．こうした美質は，同時代に活躍したドビュッシーやラヴェルの音楽からはほとんど見出すことができない．

ケクランの音楽，シュミットの音楽は，ともに，フランス音楽の実り豊かな沃野にあって，とりわけ，演奏者自身の人間的成熟をいやおうなく問うものであろうかと思う．ピアノ作品をご紹介することを通して，ケクラン，シュミットの魅力の一側面なりとも，皆さんにお届けすることができれば幸いである．

第 一 部

シャルル・ケクランの音楽

CHARLES KOECHLIN

1. ピアノ小品集 作品208 より（ピアノ独奏）
PETITES PIECES FACILES OP.208 [1946]

I. ANDANTINO
II. VALSE
III. SICILIENNE
IV. ANDANTE CON MOTO

次に演奏する作品6，作品19が初期作品であることもあり，先にピアノ独奏でケクラン後期の作品をご紹介しておきたいと思う．ケクランはピアノ小品集を多数残しているが，晩年になるにつれ，きりつめた最小限度の音で素朴な詩情を表現する俳句のような趣きが強くなる．

2. 2台のピアノのための組曲 作品6
SUITE POUR DEUX PIANOS, OP.6 [1898]

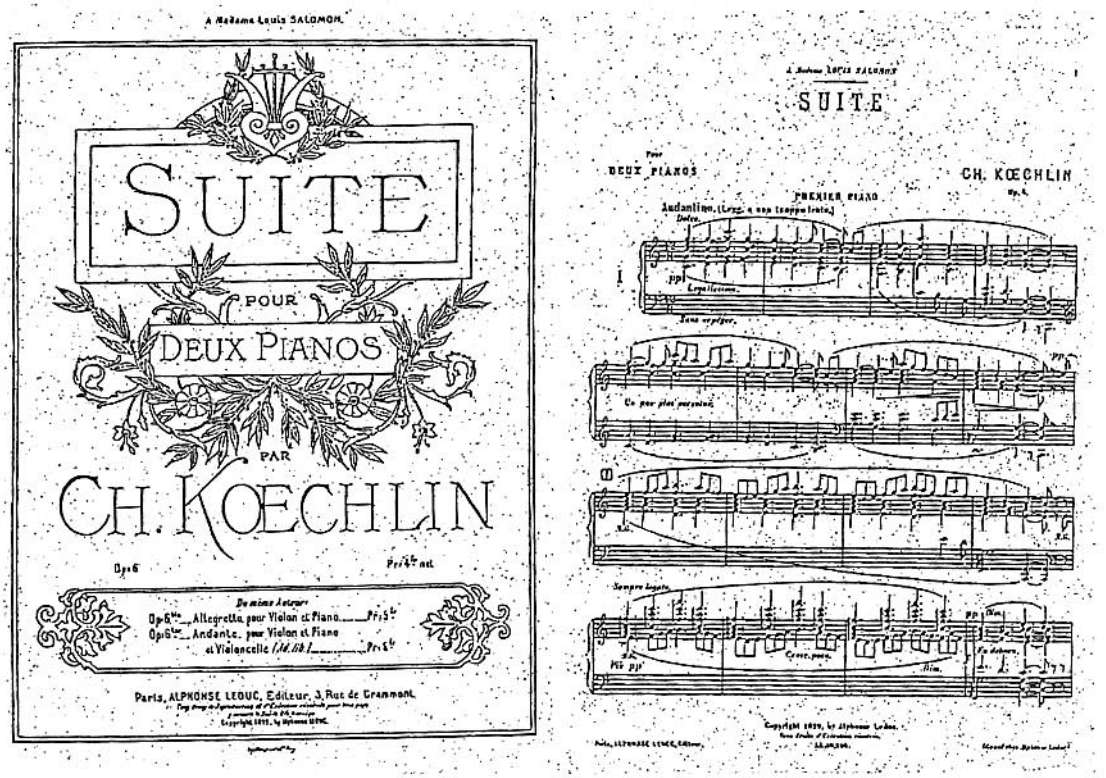
I. ANDANTINO (LEGG. E NON TROPPO LENTO)
II. ANDANTINO CON MOTO
III. ANDANTINO CON MOTO QUASI ALLEGRO
IV. ANDANTINO QUASI ALLEGRETTO

ケクラン最初期の傑作であり，露草を思わせるような楚々とした美しさは比類がない．ロマン派の毒々しい残滓が多く残る時期に，2台ピアノの繊細な音の綾そのものを主体にして，これほど質素簡潔で透明感ある作品が生み出されたことは驚異的なことである．

3.　ピアノ連弾のための組曲　作品19
SUITE POUR PIANO A 4 MAINS, OP.19 [1901]

I.	CANON	カノン
II.	LIED	リート(歌謡)
III.	FEUILLET D'ALBUM	アルバムの一葉
IV.	BERCEUSE	子守歌
V.	FINAL	終曲

多彩な内容を持つ魅力的な組曲である．全曲に漂うみずみずしい美しさは，ケクランの初期作品ならではのものであるが，特筆すべきは，終曲で炸裂するダイナミックな響きで，ケクランの図抜けた作曲技法は驚くべきものがある．



「2台ピアノのための組曲　作品6」
初版楽譜の表紙と第一ピアノパートの最初のページ

第 二 部

フローラン・シュミットの音楽

FLORENT SCHMITT

4.　ピアノ連弾曲集「5つの音で」作品34　より
SUR CINQ NOTES OP.34, POUR PIANO A 4 MAINS [1906]

I.	BERCEMENT	ゆりかご
II.	DANSE PYRENEENNE	ピレネーの踊り
III.	MELODIE	メロディ
IV.	PASTORALE	牧歌
V.	FARANDOLE	ファランドール

シュミットはピアノ連弾作品を数多く残しているが，中でも「5つの音で」は，最も親しみやすいものである．このアルバムの全ての曲は，一聴してそうとわからないものの，高音部奏者が両手の5指の音階の範囲内だけで弾けるように工夫して作ってある．むろん，そうした制約をものともせず，シュミットの個性は存分に発揮されるのである．

5.　「子供たち」作品94より（ピアノ独奏）
"ENFANTS…" OP.94 (PIANO SEUL) [1938]

I.	ENFANTS DE CHOEUR	聖歌隊の子供たち
II.	ENFANTS GATE	甘えんぼう

シュミットのピアノ独奏曲が本場フランスでもすこぶる不人気らしいのは残念なことである．技術的な弾きにくさと，無骨な外観が，優等生ピアニスト達を著しく遠ざけているものらしい．ところが実際には，決して無骨なものばかりではない．名匠ラザール・レヴィ門下の名女流モニク・アースのために書き下ろされた曲集「子供たち」は，印象派風の繊細な響きが耳に心地よく，シュミットのピアノ曲を等閑視することが如何に大きな損失であるかを実感させられるのである．

6.　ピアノ連弾曲集 「旅の数葉」作品26 より
FEUILLETS DE VOYAGE OP.26, POUR PIANO A 4 MAINS [1903-13]

I.　RETOUR A L'ENDROIT FAMILIER　帰宅
II.　BERCEUSE　子守歌

イタリア留学中のシュミットが，寄宿舎の規則を次々と破りながら旅行に明け暮れたことが，のちの作風に大きな幅と多様性をもたらすことになったことはいうまでもない．連弾曲集「旅の数葉」は，旅の日々の麗しい収穫である．殊に，「子守歌」は，連弾曲史上，屈指の名作の一つに数えられる．

7.　2つのラプソディ 作品53（2台ピアノ）
DEUX RAPSODIES POUR DEUX PIANOS, OP.53 [1904]

I.　RAPSODIE FRANCAISE　フランス風狂詩曲
II.　RAPSODIE VIENNOISE　ウィーン風狂詩曲

シュミットの作品中でも，その剽悍な個性が最もよく出たものである．後にシュミット自身によりオーケストレーションも施されたほどの人気曲であった．「フランス風」ではシャブリエを，「ウィーン風」ではシュトラウスを意識しながらも，全編がシュミットならではの個性的な諧謔味に彩られた傑作である．特に「ウィーン風」は，ラヴェルの「ラ・ヴァルス」に先駆すること十数年．ラヴェルだけを天才作曲家と祭り上げることの愚を思い知らされる．シュミットの並々ならぬ進取の気性の光る意欲作である．

＊ 演奏者 ＊　ピアノ独奏：益子，　4手連弾：小山・西原，　2台ピアノ：益子・西原

＊演奏者紹介＊　PIANISTS

益子 徹 TETSU MASHIKO　1976年栃木県生まれ．宇都宮大学卒業．
北英国王立音楽院 (RNCM) ピアノ伴奏科修士課程に在籍中．

小山 佳枝 KAE OYAMA　1974年福岡県生まれ．慶應義塾大学卒業．

西原 昌樹 MASAKI NISHIHARA　1972年岡山県生まれ．上智大学卒業．

＊お問合せは 090－8443－3927 川崎 に．e-mail は pccpiano@hotmail.com に．

＊ コンサート記録 ＊　　OUR CONCERT HISTORY

2001年2月24日 板橋区民会館小ホール 2台のピアノのタベ 〈サン=サーンス(I)とダマーズ〉<SAINT-SAENS ET J.-M. DAMASE>
ダマーズ：ソナチネ，パストラール，トッカータと終曲，サン=サーンス：アルジェリア組曲，前奏曲とサラバンド，ヴィクトル・ユゴーへの賛歌

2001年6月2日 トモノホール(市ヶ谷) 2台のピアノのタベ 〈セミクラシック(I)とサン＝サーンス(II)〉
<DEMI-CLASSIQUE ET ST.-SAENS>　コール・ポーター・メドレー，ナザレー：コンフィデンシアス，
R. R. ベネット：組曲，サン＝サーンス：アラブ綺想曲，ロマンス，ヘラクレスの青年時代

2001年10月13日 新宿文化センター小ホール 2台のピアノのタベ〈アングロサクソンとサン＝サーンス(III)〉
<ANGLETERRE ET ST.-SAENS> A. ローリー：組曲，R. V. ウィリアムズ：グリーンスリーブス幻想曲，
H. ブレイク：舞曲集，　サン＝サーンス：春はきたりて，交響曲第1番(2台ピアノ版)

2001年11月24日 榎坂スタジオ クレメンティ生誕250年に向けて<PRE-250TH ANNIVERSARY OF
MUZIO CLEMENTI>　連弾ソナタ OP.3-3, OP.14-3, 独奏ソナタ OP.24-2, 打楽器伴奏付ワルツ OP.39 より

2002年1月6日 新宿文化センター小ホール 2台のピアノの午後 〈セミクラシック(II)とサン＝サーンス(IV)〉
<DEMI-CLASSIQUE ET ST.-SAENS> A. オハーン：主題とジャズ変奏曲，ギロック：パリ2題，アストル・ピアソラ・メドレー，サン＝サーンス：前奏曲とフーガ op.99-1，バッハ=グノー：アヴェマリア，グノー(サン＝サーンス編)：協奏的組曲(本邦初演)

2002年3月17日 新宿文化センター小ホール《原 智恵子さんを偲んで》昭和25年の演奏会の曲目による2台ピアノのタベ
<IN THE MEMORY OF MADAME CHIEKO HARA DE CASSADO>　モーツァルト：2台のピアノのためのソナタ K448，サン＝サーンス：ベートーヴェンの主題による変奏曲，シャブリエ：3つのロマンティックなワルツ

2002年5月11日新宿文化センター小ホール 2台のピアノのタベ〈パリとウィーン(I)〉<PARIS AND VIENNA>
R. ブートリ：子守歌とロンド，E. パラディル：小さな鐘，サン＝サーンス：糸杉と月桂樹，
シューベルト：6つのレントラー，メヌエット ニ長調，モーツァルト：ハフナー・セレナードより

2002年7月14日新宿文化センター小ホール 2台のピアノのタベ〈パリとウィーン(II)〉<PARIS AND VIENNA>
モーツァルト：ラルゲットとアレグロ，シューベルト：ピアノソナタ イ長調 D.664(独奏：益子徹)，サン＝サーンス：序奏とロンド・カプリチオーソ(ドビュッシー編曲版)，メヌエット変ホ長調，グノー(サン＝サーンス編)：協奏的組曲(再演)

2002年9月7日 新宿文化センター小ホール 2台のピアノのタベ 〈リチャード・ロジャース生誕100年〉<THE CENTENNIAL OF
RICHARD RODGERS> ロジャース：ドレミの歌，トリンブル：The Gartan Mother's Lullaby, The Green Bough，ベンジャミン：ジャマイカン・ルンバ，ジャマイカリプソ，R. R. ベネット：組曲，ロジャース&ハート，オハーン：主題とジャズ変奏曲，H. ブレイク：舞曲集

2002年11月10日新宿文化センター小ホール 2台のピアノのタベ〈パリとウィーン(III)〉<PARIS AND VIENNA>
ロシュロール：ワルツ，ダンドロ：幻想的ワルツ，トメ：飾らぬ告白，ギロック：シャンパン・トッカータ(2台8手)，
ダマーズ：ソナチネ，ブラームス：5つのワルツ，モーツァルト：ソナタK. 448

2003年1月18日新宿文化センター小ホール 2台のピアノのタベ〈イギリスとフランス〉<ENGLAND & FRANCE>
ローリー：5つの抒情小品と練習曲，ブリテン：カンツォネッタ，トリンブル：3つの小品，グレインジャー：収穫の賛歌(2台8手)，ビエルネ：おもちゃの兵隊の行進(2台8手)，ダマーズ：トッカータ，バッサカイユと終曲，ボエルマン：ノートルダムの祈り，サン=サーンス：ヴィクトル・ユゴー賛

2003年3月21日 新宿文化センター小ホール 2台のピアノのタベ〈地中海から南米へ〉<AN IMAGINATIVE TRIP TO
SUL-AMERICA> ローレム：シシリエンヌ，サン=サーンス：アルジェリア組曲，ロベス=ブチャルド：夜曲，ロンガス：ホタ・アラゴネーゼ，
グアスタビーノ：バイレシート，鳩のあやまち，ピント：子供の情景，ミニヨーネ：ヴァルサ・ショーロ第 8,10 番，サンバ・リトミコ

2003年4月19日 新宿文化センター小ホール 〈アレクサンドル・タンスマンの世界 I〉
<DEDICATION TO ALEXANDRE TANSMAN>　子どもの魂(6手用，ジャン・クラ作曲)，
以下全てタンスマン作品：ピアノを弾く若者第1，2巻(連弾)，ブルースの形式による前奏曲，<友人のアルバム>より(以上独奏)，カーニバル組曲，シュトラウスのワルツによる幻想曲(以上2台)，アンコール/黒人の少年(独奏)

2003年8月15日 新宿角筈区民ホール 〈真夏の夜の2台ピアノコンサート第一夜 フランス音楽をめぐる旅〉<MIDSUMMER
EVENING CONCERT I>　サン＝サーンス：白鳥，シャブリエ：3つのロマンティックなワルツ，ケクラン：2台ピアノのための組曲作品6，ダマーズ：誕生日の挨拶，ロジェ・ブートリ：おしゃれ泥棒(6 手)，アーン：2台ピアノのためのワルツ集<ほどけたリボン>(抜粋)

2003年8月16日 新宿角筈区民ホール 〈真夏の夜の2台ピアノコンサート第二夜 セミ・クラシック〉<MIDSUMMER
EVENING CONCERT II>　ケテルビー：ペルシャの市場にて，ベンジャミン：ジャマイカの2つのストリート・ソング，ウォーカー：ルンバ，シャルル=アンリ：Blowing Blues,生まれたばかりの王女のパヴァーヌ，3たす3(子供のジャズ)，タンスマン：大西洋横断ソナチネ，コール・ポーター・メドレー，R.R.ベネット：丘を越えて，夜はやさしく，組曲，アンコール/ギロック：小さなすずめ—ピアフに捧ぐ(6手)

2003年9月7日 新宿文化センター小ホール 〈アレクサンドル・タンスマンの世界 II〉
<ALEXANDRE TANSMAN ET NOUS>　ラヴェル(テデスコ編)：亡き王女の為のパバーヌ，ストラヴィンスキー：タンゴ，ジャン・クラ：子供の魂(6手)，カサド：愛の言葉．以下，全てタンスマン作品：ピアノを弾く若者第3巻(連弾)，間奏曲集より(独奏)，マズルカ(ピアノ独奏版)，大都会(2台)，ポーランド狂詩曲(2台)，アンコール/日光の嘆き

2003年12月17日 横浜栄区民センター リリス 〈2台ピアノ クリスマスコンサート—バロックからポップスまで〉
<TWO-PIANO CHRISTMAS CONCERT>　バッハ＝グノー：アヴェマリア，バッハ：主よ人の望みの喜びよ，モーツァルト：ラルゲットとアレグロ，グノー(サン＝サーンス編曲)：協奏的組曲，オハーン：主題とジャズ変奏曲，クリスマスソング選(戦場のメリークリスマス，そりすべり，きよしこの夜)，タンスマン：カーニバル組曲

2004年1月28日 横浜港南区民文化センター ひまわりの郷 〈雲のない日の子守歌——レイナルド・アーンの世界〉
<Berceuses des jours sans nuages – La musique de REYNALDO HAHN>　7 つの子守歌，ライネッケの歌による可愛い変奏曲，アイルランド民謡に基づく前奏曲(以上連弾)，メランコリックな奇想曲，傷病兵に捧ぐ，ワルツ集<ほどけたリボン>全曲(以上2台)